

メメント・イマジカ : 身体記憶へ

著者名(日)	河本 英夫
雑誌名	「エコ・フィロソフィ」研究
号	3
ページ	109-118
発行年	2009-03
URL	http://doi.org/10.34428/00003398



メメント・イマジカ

身体の記憶へ

文学部 河本英夫

ヴァイオリン・ジャズ、天使に似合う曲
[マンゴーのワルツ・寺井尚子]

夜汽車

空

天使の図柄を二、三入れておく

養老天命反転地の図柄、奈義の竜安寺

最後のセルに文字

三鷹天命反転住宅

天使の棲家

無限性の記憶を感じさせる図柄

地平線、水平線、入道雲、抜けるような青空、大海原、海底、火山、岩、密林、砂漠、地球、

墓地と死体、さまざまな墓地、廃墟、ローマの遺跡、沖縄と沖縄の墓地、青森恐山、彫刻、彫刻の墓地(箱根彫刻の墓地)

イヌが死体（もしくはえさ）を食べている風景

発達障害児(数点、人見さんから借りる)

私はどこから来て、どこへ行こうとしているのか。

これは出自への問いでもなければ、到達すべき目標への問いでもない。

一つの場所がある。

それは私にとって最適な場所とはほど遠い。

だがそれは、私にとって唯一の場所なのである。

メメント・イマジカ

身体記憶へ

人間は、一生をかけて人間へとようになっていくような、つねに途上にある存在である。
だが誰であれ、いったいどの途上の、どこにいるのだろうか。

人間の本質は、理性的であること（アリストテレス）でもなければ、思惟すること（デカルト）でもない。
あるいはたんなる繊細の精神（パスカル）でもなく、また言葉をもつこと（ルソー）でもない。
むしろ一生をかけて、際限なくみずからに成りゆくことである。
どの途上においても、人間はみずからの位置と、みずからの未来をイメージしている。
それが予期である。
現時点と未来を現時点において結ぶもの、
それこそ物語である。
そしてそこに、尽きぬ希望があり、身の丈を超えた絶望がある。

[音入れ]バラのひとりごと、あるいはオール・フォー・ユー

ミケランジェロの思い出（彫刻、オブジェ）
ダヴィデ王、ピエタ、物体、卵、冬眠する昆虫、寝た切りの障害児、少し身体を起こすことのできるもの、
移動を開始しようとするもの、

ダ・ヴィンチ、ラファエロも入れて、ミケランジェロを交互に。
天使、カオス図形（天使図版2＋カオス図形1）

この千年に一人の職人は、どのような仕事にも二度と同じようにかかわったことがない。すべての患者に
個性があるように、ミケランジェロの作品にはすべて個性がある。
すべての患者に対して、そのつど一から治療を立ち上げるように、
ミケランジェロは、すべての作品を一から作り上げたのである。

前方には、ダ・ヴィンチという人間の枠をはるかに超え出た天才がいる。
後方には、出自と素質に恵まれた女好きの美男子ラファエロがいる。
ミケランジェロ自身は、貧困な小役人の息子であり、体は頑丈だが、少なからず無男である。
そしてダ・ヴィンチからは、ただの石切り職人と呼ばれ、ラファエロのように社交界に呼ばれることもな
く、職人三人とひとつのベッドで寝起きを繰り返している。

途上とは、先行する天才と後行の才人の間のことではない。
みずから自身の可能性と選択をかけた場所、それこそみずからの途上であり、
天上と地上の間のこの場所のことである。

風景・環境映像
音入れ

ミケランジェロの書いた膨大な書簡の大半は、お金と時間のなさへの不満に満ちている。

不満とは、自分自身に自足しないことであり、
みずから自身への不満とは、誠実さの証である。

すべての治療は、希望で開始し、不満と後悔で終わる。
後悔とは、他の選択もありえたという可能性の獲得であり、
次の治療への予期である。
不満と後悔とは、過去に拘泥することではなく、
みずからの未来へと自分自身を投げ出すことである。
そして、そこに新たな希望がやってくる。

システィナ、パチカン、シシリア、

[音入れ]シヴァの女王、あるいは激しい愛の歌
発達障害者の動画と、時々天使の図柄を織り交ぜる（冒頭、途中、最終）
人見さんのビデオでまだ使っていないもの
最後の2セルは、天使と人見さん自身（ここでは純粋に女優として、患者のいない本人だけのセル）

[音入れ]メモリー系の曲、
意識は生命のごく最近の発明物だが、身体は40億年の生命の記憶を携えている。
身体には、歴史的疲労もあれば、個体的欠損もある。
だが生き抜くことの工夫に限りがあるわけではない。

イメージ画像
カオス図形(木本さんから借りる) 2作品静止画像

これらの運動はどこに焦点をもつのだろうか？

あるいはどこに行こうとしているのか？

さらには何になろうとしているのだろうか？

そして

それらの問いは、この運動にとって、ふさわしい問いなのだろうか？

カンブリア期バージェス動物群、クラゲ、横歩きするカニ、シーラカンス、サメ

各種サカナ

光と流体のイメージ

風景

大野一雄のビデオを織り交ぜる

「魚が一匹入ってきた。魚が一匹入ってきたことによって、ぐらりと変わってきた。それだけの違いです。魚が入ってきたおかげで、関係が、死が生を照らしているように、生が死を照らしているように、生がいきいきと。さあ、そういうなかで自由にやっごらんさい、内的に。」

大野一雄『稽古の言葉』

大野一雄動画

クジラの動画(30秒)

陸上は、海よりもはるかに危険な環境である。

強い日差しと乾燥した空気。

生命の上陸は、四十億年の生命の歴史の中で、最も果敢で危険な賭けであった。

そう、歩けない障害児が、明日空中を飛ぶほどの賭けだったのである。

クジラはひと時、陸に上がってきた。

陸に上がると、身体は乾燥し、強い日差しに晒され、

なによりも体重が7倍になる。

7倍の体重を身体の自由度に転換できなければ、海に戻るよりない。

上陸の結果、身体の自由度はオーダーを二桁更新した。

呼吸も、食べることも、歩行も、走行も、なにもかも新たな意味を獲得したのである。

そして人間はいまだその新たな意味の全貌をつかんではいない。

重力とは、下に引っ張る力のことではない。

立ち上がることは、重力に抗することではない。

(この点でまぎれもなくボバースは誤っている。)

重力とは、身体の根源的不透明さのことである。

重力にかかわることは、動作とともに身体に感じられる

微小差異のことである。

この差異の気づきとともに、身体は選択肢と動作の多様性を獲得する。

重力のイメージ

チョウ、各種昆虫、各種トリ

風景

大野一雄のビデオ

「目がこうあるでしょう。そうするとあなたの魂が目を通してすうっと外側のほうに出かけていく。すると外側のほうから、何か鳥のようなものが飛んできて、魂の鳥のようなものが飛んでくる。そして魂のなかにすっと入ってきますか。そのために目が通りやすいようにしてありますか。目から鳥が入ってこようとしているときに、入ってこられるような目でやっていますか。いつも動作しながら、すっと入ってこられるように、すっとやらないとだめだ。」

大野一雄『稽古の言葉』

動画もしくはスチール写真

カエル、恐竜、現生爬虫類(イグアナ等)

風景

オタマジャクシがカエルへと成るとき、異なる身体を感じているのだろうか。

もはやオタマジャクシでもいまだカエルでもないとき、いったいどのような身体を感じているのか。

爬虫類の足は、地面と平行に出現し、第二関節で地面に垂直に折れ曲がる。体幹は大地とつかず離れず、大地の刻印を帯びている。

(腹ばいで這いまわる小児の動画 数十秒)

爬虫類の位置から人間まで駆け上がらなければならない身体がある。

健常者よりもより多く跳ばねばならない身体がある。

クマ、トリの魚を捕る場面、サル、ゴリラ、オランウータン、ネアンデルタール人
風景

鳥になるようにしてはじめて歩くことのできる身体がある。
健常者とは、異なった道筋で跳ばねばならない身体がある。
(寝たきり障害者)

身体は世界と環境へとかかわるさいに、一切の負荷を受ける。
問題は、外からも内からも出現する。
身体は、いっさいの可能性を賭けて、問題解決にあたらねばならない。
そう、認知課題とは、生き抜くことの別名だったのである。
ただ生き抜くだけであれば、既存の能力を活用すればよい。
問題解決へと向けて、経験と能力そのものを形成すること、
これこそ認知運動療法である。

人間の奇形、病者、規格外、坐禅、巡礼、乞食、各種修行、障害者、各種治療、サーカス、中国技芸等
風景

意識は、生命史四〇億年の最大の発明の一つである。
意識の本質は、世界を知ることではない。
むしろそれは、世界とのかかわりを組織化することである。
意識は、いまだないものへと向かってみずから作動させる。
そこにイメージが出現する。
イメージは、空想でもなければ、ヴァーチャル・リアリティでもない。
そしてイメージは、意識の可能性を宇宙大に拡張したのである。

ふさわしい映像

「ああ、身体は悲しい。それに私は すべての書物を読んでしまった。
遁れよう！ 彼方へ遁れよう！ すでに感じる、鳥たちが
未知の泡立ちと ひろがる空のはざまにあって陶酔しているのを！
何ものも、海に浸されていくこの心を引きとめることはあるまい。

異国の自然を目指して いまこそ錨を揚げるのだ！

希望を抱くたびごとに、無残にさいなまされた倦怠の化身も
なおも信じる、ハンカチを振る この最後の別れは！」

マラルメ「海の微風」

「私の眼を消してごらんなさい 私はあなたを見ることができます
私の耳をふさいでごらんなさい 私はあなたを聞くことができます
そして足がなくとも あなたの所へゆくことができます
口がなくとも まだあなたを呼び出すことができます
私の腕を折ってごらんなさい 私は手でするように
私の心であなたを捉えます
私の心臓を封じてごらんなさい すると脳髄が脈打つでしょう
そして脳髄のなかへ火を投げ入れようとも
私はあなたを血のうえに担っていくでしょう」

リルケ「巡礼の巻」より

「物語イメージとは、もともと頭をたれて、羽をたたんで、
うとうとしたり、歌ったりするものだ
それは緑にゆれる木々において、
ふかい湖に影をうつしている
——私の物語イメージとは
そんな美しい色のアイコンなのだった——幼い私の
よくなじんだ鳥、私にABCを教えた鳥
森に寝こんでいた私に
はじめて言葉を言わせた鳥——
私は智慧にみちた眼をした幼児だった。

いまは果てしなくつづく秃鷹の歳月が
凄まじい轟で
天上の樂園をゆさぶって、
私はそんなざわめく空を見つめあげて
のんきな一人思いに浸ることができない。
もしもっと静かな翼がその柔毛を
私の精神の上にひろげ
言葉と詩で心をなぐさめようとしても——
そんなことは禁断、許されないと世間はいうのだ！

だが私の心が琴線にふれてふるえないならば、
罪を犯したようなきになるのだ。

ポー「ロマンス」

[映像]

詩人たちは、自分自身でさえ気づいていない、世界とみずからのかかわりにかたちをあたえた。
かたちはイメージからやってくる。

そして

イメージは知覚に先行し、身体と身体動作とともにある。

岩崎さん、中里さん、渡部さんの治療風景(それぞれからもらう)、池田さんが撮れる場合は、それも。
3人(4人)をセラピストだけではなく女優としても。

音入れ[リズム]

身体は、私のものであるが、つねに私以上のものである。

あるいは私以上に、私自身である。

身体が破壊された時、何かが失われるが、私が失われるわけではない。

だが私自身への手がかりはどこにもなくなってしまふ。

みずから自身の身体を獲得したものだけが、他者の身体を回復させることができる。

しかも獲得した度合いに応じて。

進化には一つの回路があるわけではない。異なった条件のものは、異なった道筋を進んで生き抜いていく。

リハビリとは、人間へとなり続けるためのささやかな異なる道筋を見出すことである。

人間となることは、どのようなひ弱なヒューマニズムとも無縁である。

人間へと向かう異なる道筋は、あらかじめ施設されているのではない。

しかもこの異なる道筋に限りがあるわけではない。

だからリハビリとは、進化に似たリスクをつねに引き受けることである。

リハビリの課題は、つねに新たな道筋を探しつづけることであり、とりもなおさず人間の可能性を拡張し続けることである。

この可能性の拡張が、障害者と私たちの希望でもあるように。

この多岐にわたる道筋の中で、すでに発見され、見出された道筋はいまだ1%以下にすぎない。
リハビリが総力戦であるのは、このためである。

[音入れ](ヴァイオリン)

天児牛大のビデオ

自分自身にもじっくりいかない身体がある。宇宙大に広がったり、点のように収縮してしまう身体がある。
躍ることで初めて自分自身に回復でき、語ることで初めて自分自身で手にすることのできる身体がある。

この天性のダンサーは幼少期より、自分の身体の不思議さを抱えたまま、まるで哲学者のように、つねに自分の身体を問うていた。

そして問いをそのまま身体で表現したのである。

身体とは、環境の中にすでに存在してしまうことの疑問符のことである。

外部観察者は、これを「ダンス」と呼んだ。

重力と空気と光のなかでの身体動作がある。

人間は突っ立ったままの死体である。

音とは、肌に触れる空気の振動である。

眼は光によって光へと形成される。

身体動作をつうじてこれらの環境を感じ取り、環境とのかかわりを制御すること。

内部観察者は、これを「暗黒舞踏」と呼んだ。

暗黒舞踏は、環境への身体をつうじた探索であると同時に、違和感を抱えたみずから自身へのリハビリテーションである。

身体と動作に注意を向けることによって、身体を世界の現実の比喩として活用すること。

世界がつねに身体から、身体をつうじて、身体として見えてくること。

身体はこうして世界の関節となり、蝶番となる。

身体はこうして世界の繋ぎ目をささえる現実の紐帯となる。

[音入れ、マイウェイ]

人見さんから、言葉のつうじない障害者に言葉で語りかけている治療風景を借りる。

天使の図柄と交互に

言葉は、直接身体に及ぶことはない。

言葉をつうじて認識し、認識から身体を動かすことはない。

だが言葉は、空気の振動と音と気配によって、つねにイメージをあたえていく。

イメージは、経験を動かし、そして経験を動かす自分を獲得させる。

イメージは、人間の小さな可能性に入り込み、それを動かし、拡張する。

イメージは、天使のようにそこに存在し、そこに働きかけるが、重さがない。

イメージは重さがなくても、その場所に働きかける。

イメージは、途上を歩み続ける、

障害者と私たちにとっての

生き抜くための最大の手がかりなのである。

スタッフ

出演

人見眞理

稲垣諭

岩崎正子

編集・制作

大崎晴地他

作・演出

河本英夫